

出会い頭の「お疲れ」/「お疲れ様」について ～アンケート調査を用いての使用区分～

久木田 陽子

辞書類での「お疲れ(様)」に関する記述は、「疲れたと思われる人を敬い、気遣って言うあいさつ言葉」(『日本国語大辞典 第二版』二〇〇二)や「仕事が終わって帰る時に言う挨拶」(『集団語辞典』二〇〇〇)とされているが、「お疲れ」が出会い頭にも使われている実態をアンケートを用いて調査した。日本語母語話者三三〇名(男性九四名・女性二三六名)を対象に二十二項目の質問を作成し、十代一九三名、二十代一三七名の大学生から回答を得た。

「昼、学校でその日はじめて部活動の先輩に会ったとき」の設定で、「お疲れ様です」とあいさつするとの回答が二十代五四・四%で、「こんにちは」の五一・四%を上回った。一方、十代では、「お疲れ様です」が三七・五%で、「こんにちは」の四六・八%を下回っている。選択肢には、黙礼(会釈)も含まれていたが、いずれも九%以下であった。(複数回答可)

この点から、「お疲れ様です」を出会い頭に使われ始めるのは、学生が大学に入ってからで、まだ一～二年生の間には、あまり出会い頭に「お疲れ様です」を使わないのに、三～四年生になると過半数を上回る使用が見られることがわかる。

アンケートの自由記述にも「大学に入学してから出会い頭で『お疲れ』と挨拶するようになった」との記述が多数見られた。

さらに「昼、スーパーやコンビニなどの店内で部活動の後輩に会ったとき」の設定で、十代・二十代ともに「こんにちは」が十八%前後の使用であるのに対して、「お疲れ」の使用が五十三%前後であることから、学外で部活動の仲間同士が「お疲れ」の使用を通して仲間意識を伝え合っていることがわかる。現代の学生にとっては「こんにちは」がよそよそしい挨拶言葉で、「お疲れ」が同族意識を確認する内向き挨拶表現であることがわかる。

また、「勤め先(アルバイト先)」に出勤して、挨拶するときの設定で、十代の「お疲れ/お疲れ様です」が七二・六%で、二十代の六三・九%を上回っている。もしかするとアルバイト先での「お疲れ」の多用が、キャンパスでの部活の方に影響を与えたのかもしれない。同設定で「おはようございます」は、十代で二九・八%、二十代で一八・九%となっている。これは、速司正成(二〇〇四)の「あいさつ表現としての『おはよう』」の調査研究(『山口支部研究紀要』第九号、一三五～一五〇頁、全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会山口支部発行)の結果を大幅に下回ることから、わずか十年ほどの間にアルバイト先に出勤して、挨拶するときの「おはようございます」が「お疲れ/お疲れ様です」にとって代わられたことを示すものである。今後の推移をみる上でも、追跡調査が必要であると思われる。

(くきた・ようこ)